

第 53 回 私のなかの司馬遼太郎

司馬遼太郎は、1923(大正 12)年、大阪に生まれる。43 年、国立大阪外国語学校蒙古語科を仮卒業、学徒出陣。45 年、戦車第一連隊士官として栃木県で敗戦を迎える。48 年、産経新聞社に入社。60 年、「梟の城」により第 42 回直木賞を受賞。61 年、産経新聞社退社(以上「風塵抄(二)」より)。退社後本格的な著作活動に入り、数々の業績を残して 1996(平成 8)年 2 月 12 日死去した。本稿では筆者がこれまで最も親しんできた作家のひとりである司馬遼太郎について書いてみたい。

筆者の若い時は小説類を含めていろいろなジャンルの書物を手当たり次第に読んだものである。手当たり次第といっても読書がとくに趣味というほど熱心なものではなく、この年齢にいたるまでは細々とした長い読書歴であったといったほうがよいかもかもしれない。読書の対象は、年を経るにつれてジャンルが偏狭になり、最近是一段とその傾向が強くなってきたようである。

若い多感な時に読んだものをはるか遠くなった記憶のなかから瞬時に掘り出してみると、「戦争と平和」(トルストイ)、「ジャン・クリストフ」(ロマン・ロラン)、「日はまた昇る」「誰がために鐘は鳴る」「武器よさらば」(ヘミングウェイ)などとか、日本の作家では夏目漱石、横光利一、川端康成、三島由紀夫など、最近の読書傾向とは遠くかけ離れたものが脈絡もなく出てくる。

小説をジャンル別に分けてみると、純文学、恋愛小説、推理小説、冒険小説、歴史小説、時代小説、社会小説など多種多様になるが、自分自身の趣向は年齢とともに少しずつ変化してきている。書棚には趣向とは関係ないものや、気まぐれで買い求めたもの、読み始めて途中で読むのをやめてしまったものなども含めて、今や積もり積もってそれらが溢れ出ている。連れ合いの本もかなりある。小説以外の評論や論説類などの書物の大部分や、かつて一時期のみ熱中した作家のものは本棚の奥のほうに詰め込まれているか、手が届かないほどの高い上の方へうずたかく積んである。そのようななかで歴史小説と時代小説類は比較的に目と手がとどきやすいところにある。

最近では藤沢周平や池波正太郎や司馬遼太郎などが目立つところにおかれている。藤沢作品や池波作品は昨今のテレビ番組でもしばしばお目にかかっており、それらを見るのが休日くつろいだ時の楽しみのひとつでもある。藤沢周平シリーズでは気に入ったもののビデオもいくつかあるが、なかでも「たそがれ清兵衛」は大変気に入っており、これまで何度も再生して観ている。池波正太郎の「鬼平犯科帳」も好んで観ている。藤沢周平や池波正太郎の作品については他日別稿でまとめてみたいと思っている。

歴史小説では筆者にとってはノンフィクション作家ともいわれる司馬遼太郎の作品に長年にわたって飽きずに惹きつけられてきた。司馬遼太郎は太平洋戦争において一戦車兵として兵役中に終戦を迎え、多感な青年として混乱の時期を過ごした経験もその作品に多少影響していると思うが、骨太な基調の文章のなかに感じられる繊細な感性はどこから来たのであろうか。司馬作品を読んで感じたことは、その歴史観や登場してくる人物や臨場での描写においてさえ淡々としていて、それにもかかわらず後まで心に残るような文章が多いことである。登場人物にしても大概が直視的かつ写実的で、作家自身の濃厚な感情移入がなく、むしろ淡々としており、一方ではそれら人物への思いやりも程度の差はあれ感じられるのである。作家の司馬遼自身は元来悪意を持つことが稀な性格で、人を愛することがごく当たり前と思っている人物ではないか。

司馬作品は数えきれないほど多数あるが、筆者の記憶にある最初に読んだ作品は、秀吉暗殺を狙う伊賀忍者と彼を見張る役のくノ一の愛を絡ませた「梟の城」で、これは1960年の直木賞受賞作となった。その後次々と「戦雲の夢」「風神の門」「国盗り物語」「功名が辻」「新史太閤記」「播磨灘物語」「箱根の坂」などの戦国時代を背景にした小説や、「燃えよ剣」「竜馬がゆく」「菜の花の沖」「世に棲む日々」「翔ぶが如く」「胡蝶の夢」「花神」など、幕末の混乱期からの明治の初期を題材にした作品などを世に出してきた。司馬遼で忘れられないものに1990年代に産経新聞朝刊に掲載された随筆をまとめた「風塵抄(一)」「風塵抄(二)」がある。この「風塵抄」は著者があとがきで言われている『「風塵抄」とは、小間切れの世間ばなしと解してもらえばありがたい』というには内容が大変奥行きが深い。

明治時代の日本が列強に入る以前の日露戦争時の満州における日本陸軍の苦闘と日本海での東郷平八郎司令長官率いる日本艦隊の帝政ロシア軍との戦いを描いた「坂の上の雲」は、部分的なところもいれると数えきれないほど何度も読み返したものである。筆者の読書癖にはどうしようもない「ななめ読み」があるため、「坂の上の雲」ではそれが頻回に起こった。

「坂の上の雲」には日本海軍の天才的な参謀秋山真之と同じ伊予松山で小学校からの親友である俳人正岡子規や、同郷で後年子規の後継者となる俳人として有名な高浜虚子、さらに河東碧梧桐や夏目漱石なども出てくる。正岡子規「仰臥漫録」によると、子規は20歳時の1888年(明治21年)はじめて咯血を経験し、その2年後再び咯血した時から子規(ホトギス)と号するようになった。子規は肺結核のほか脊椎カリエスも発症して、1899年(明治32年)からはほぼ寝たきりになり、日露戦争開戦前の1902年(明治35年)9月18日午前、「痰一斗糸瓜(へちま)の水も間に合わず」の一句を含む辞世三句を残したのち臨

終となり、翌 19 日死亡した。その時の様子は「坂の上の雲」第 2 巻「十七夜」に描かれており、高浜虚子は子規の死の夜に「子規逝くや十七日の月明に」と口ずさんだという。

「坂の上の雲」には日露戦争(1904 年～05 年)(明治 37 年～38 年)での旅順攻囲戦、奉天大会戦、日本海海戦などの戦いの状況が壮大なスケールで叙事的に描かれている。秋山真之の兄秋山好古が属する乃木陸軍の作戦の拙さが目立った。作者は、「ロシヤは自らに敗けたところが多く、日本はそのすぐれた計画性と敵軍のそのような事情(帝政下の国情)のためにきわどい勝利をひろいつづけたというのが、日露戦争であろう(第二巻あとがき)」と述べている。

全 6 巻に収められている文芸春秋版「坂の上の雲」の最終第 6 巻には日本海軍の一方的勝利に終わった日本海海戦のクライマックスが描かれており、終章近くの見聞の様子ノンフィクション小説らしく詳細に記述されている。この部分は本の表紙が擦り切れるほど何度も読み返した。

司馬遼太郎の短編のなかで、筆者にとって最も記憶に残るのは戦国の梟雄といわれた伊達政宗の少年期から晩年までの略記のひとつである「馬上少年過ぐ」である。略記文のはじめに「馬上少年過ぐ 世平らかにして白髪多し 残軀天の赦すところ 楽しまざるをこれ如何せん」という詩と「四十年前少壮の時 功名聊復自私に期す 老来識らず干戈の事 只把る春風桃李の卮」が挿入された情景がある。筆者にはこの詩が忘れがたく、いろいろなところでしばしば話題にしていたところ、文通で知合っただけの三重県の医師 I 先生から数年前ご自分で祐筆された「馬上少年過ぐ」の四行詩の大変立派な色紙をいただいた。それを額にして拙宅の居間に飾り、鑑賞するたびに晩年の政宗公に思いをはせている。

司馬作品には「歴史を紀行する」や「街道をゆく」などの紀行ものも多い。「街道をゆく」は日本国内から海外に至るまでの読み切りの紀行集として 1971 年(昭和 46 年)朝日新聞で連載開始され、1996 年(平成 8 年)作者が急逝するまで続いた。朝日文庫「街道をゆく」26 集「嵯峨散歩、仙台・石巻」には筆者の仙台のことが書かれている。司馬のどの紀行文からも訪問地への思いやりが感じられ、とくに東北にはよい思い入れで書かれているようである。ただ東北に住むものとしては司馬遼の東北像は淡々としているなかで、何となくひいき目にみているという感じもする。司馬は書いている「客をもてなすのも、情義である。その情も義も奥州人においては激烈なものといっていい。つまりは謡曲『鉢の木』の心意気である」と。大雪の日、尾羽うちからした浪人のあばら家にたずねてきた旅の僧のために秘蔵の鉢の木を焚いて暖をとる話である。

繰り返すが、率直に言って司馬遼太郎の作品には叙事的な文中に登場人物へのあくまでも暖かな思いやりが感じられるのである。

これからも当分司馬遼太郎の作品から抜け出すことは難しい。